

# 園だより

## 6月号

令和4年5月31日  
新宿区立西戸山幼稚園  
園長 佐藤 淳穂



### 「ぴょーん」 ―絵本とカエル―

園長 佐藤 淳穂

つどいのへや「どんぐり」に、1歳3か月の女の子が遊びに来ました。手には絵本を持っています。「ぴょーん」という小型の絵本(ポプラ社)で、幼稚園でも人気の一冊です。表紙には緑色のカエルが描かれていて、縦に1ページ目をめくると、そのカエルがぴょーんとジャンプをします。読み進めると、次々にいろいろな生き物がジャンプをして、最後は子どももジャンプするという楽しいお話です。

さて、本園には2匹のアマガエルがいます。絵本の表紙と同じ緑色で、3センチほどの小さなかわいいカエルです。ちょこんと石の上に座っていると愛らしいのですが、全身を使って虫を捕まえるドラマティックな雄姿を見せてくれたり、見事なジャンプを披露してくれたりもします。カエルの絵本を手放さない小さな女の子に、本園のアマガエルを見せない手はありません。

本物のカエルを見た女の子は、目をまんまるくしました。そして、飼育ケースの中のアマガエルを指さし、次に絵本の表紙のカエルを指さし、次にまたアマガエルを指さしました。「おんなじ!」と言っているのでしょう。お母さんも私も、つどいのへやの教師も、「おんなじだね」と言って喜びました。

聞いてみると、女の子は寝るときもそばに置くらいその絵本が気に入っているそうです。その中に登場するカエルが、実際に目の前に現れてジャンプをしたのですから、それはうれしかったです。女の子も膝を曲げてジャンプをしていました。そのあと、つどいのへやでは大型絵本版の「ぴょーん」の読み聞かせをしたそうです。

絵本の魅力をあらためて感じたひとときでした。絵本の中でカエルと出会っていたことで本物のアマガエルとの対面が感動的なものとなり、次に絵本を見たときにはカエルへの思いがさらに深くなっている…。現実とお話の境目がはっきりしない乳幼児期だからこそ、子どもたちは絵本の世界で大人にはできない、めくるめくような体験をしている気がします。

絵本は、好きなページを何回もめくってゾクゾク、ワクワクする気持ちを繰り返し味わうことができます。小さな子どもでも、自分でその世界にたどり着くことができます。お家の人や先生に読んでもらった絵本を自分でも開いて、物語を想像し、お話の世界に浸るのです。

生き物との触れ合いも絵本も子どもの内面を育むかけがえのない環境です。指を目いっぱい広げて、指先の吸盤で飼育ケースのガラス面に張り付いているアマガエルに言いたいです。「明日もよろしくね。」



「ばったが… ぴょーん」